
結論は殺人 その3

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結論は殺人 その3

【Nコード】

N9340T

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

この物語の主人公は最終的に人をひとり殺めてしまう。なぜ？誰を？答えは最後に分かるだろう。

作：青木弘樹

あれから1ヶ月ほどが過ぎた。

実はこの1ヶ月の間に、長年注文してくれていた会社2社から契約を切られていた。どうも食中毒のことがばれてしまっていたみたいだ。あの清水がばらしたのかもしれないが、とにかく栄一にとって痛いことだった。

雄二はというと、なんとレミと時々会っていた。あの公園で。もちろん会って少し話をするだけだし、それ以上のことはないが、お互い連絡先は知っている。レミの旦那にばれたら一大事だ。

雄二は店のことを心配しつつ、レミとの密会（？）に戸惑いつつも、人生を楽しんでいた。

「そうだ。この間、僕もスクラッチくじ買ってみたんです」

「どうでした？」

「全然だめでした。4000円分買って、当たったのは800円だけ」

「ふふふ。私もそんな感じですよ。この間はついていたんです」

「なかなかうまい話はないですよね」

「ええ」

「けど僕はついてますよ」

「どうして？」

「だってレミさんとかうってお話出来てるんだから」

「木ノ本さん…お上手ですね」

「ほんとですって」

「ふふふ…ありがとう」

雄二は楽しかった。この時間のためだけに生きている。そんな感

じだった。

さらに1ヶ月が過ぎた。

今日は水曜日。店は休み。テレビを見ている雄二。総理大臣が無表情に淡々と話す。この人は人生楽しんでるのだろうか。毎日、批判にさらされて、つらくないのだろうか。僕らの知らない所で裏金をもらい、愛人と遊んでいるのだろうか。まあ…どうでもいいことだ。

店の方かというと、やはり客が少し減っていた。王将弁当は最近テレビCMも多くなっているようだった。時々見るテレビCMは、雄二にとって決して気持ちのいいものではなかった。

雄二はエルに会いに行くことにした。いないかもしれないが、とりあえず行ってみた。

「こんばんは」

ドアが開いていたので、入ってみた。誰もいない。

「あのー、こんばんは」

間もなくしてエルが現れた。

「おお！雄二君！久しぶりだな」

「お久しぶりです」

エルは相変わらず陽気だった。

「どうした？とりあえずコーヒーでもいれようか？」

「あ…すいません。じゃあ、いただきます」

エルはコーヒーを作り、テーブルに置いた。

「いただきます」

雄二は一口飲んだ。

「あの…今日は占いはやってないんですか？」

「やってるよ。このあと…8時半くらいにひとり来る予定だ。本業も一段落したし、ちよっと占い業も頑張ろうかなって思ってるね」

「そっでうすか」

「何か相談でもあるのかい？特別にタダで聞くんよ」

「ええ。実は…」

雄二は店のことやレミとのことを話してみた。

「なるほど。王将弁当ね。それは手強い相手だね」

「はい」

「実を言うと何回か注文して食べたことあるんだ。確かに安くて美味しかった」

「みたいですね」

「今は本当にでかい企業のやりたい放題の世の中だからなあ。家電量販店のせいで町の小さな電気屋は潰されるし、コンビニのせいで地域の個人商店も潰される」

「そうですね」

「時代の流れだから仕方ないけどね」

「…」

「まあ、それはいいとして、君としてはそのレミって人のことが気がかりなんだろう？」

「え？ええ、まあ…」

「本気で好きなら、思い切って告白するしかないよ」

エルはいきなり結論を言った。

「！…。確かに…そうですね」

雄二も本当は分かっていた。しかし人は誰かに背中を押されないとなかなか動けないものだ。

「子供がいないなら、そんなに問題ないんじゃないかな。その旦那はろくなやつじゃないみたいだし」

「はい」

「あたって砕ける。それが人生だ」

「はい」

「あ、でも修羅場になったからって俺のせいにしないでよ」

「ははは…分かってますよ」

二週間ほどが過ぎた。

この二週間の間、雄二はレミと会っていなかった。というより連絡しても返事がこなかった。雄二はレミの携帯電話のアドレス帳には女性として登録してある。雄二も女性のフリをしてメールをしていた。

そんなある日の夜。ヒカリハイツから弁当の注文が来た。

「…」

雄二は少し緊張しつつも、配達に出た。

「まいどうも。オーケイ弁当です」

”ガチャ”

「はいどうも」

レミの旦那が出てきた。

「いくら？」

「600円です」

「はい、これ」

レミの旦那は600円ちょうどを雄二に渡した。

「まいどうも」

雄二はお金をしまったあと、部屋に戻ろうとするレミの旦那に話しかけた。

「あの…」

「？」

レミの旦那は振り向いた。

「あの…今日は…レ、レミさんは…？」

「はあ？」

レミの旦那は不思議そうな顔をしていた。当然だが。

「ちょっと話をしたいのですが…」

雄二はドキドキしていた。

「話…？」

「あの…レミさんに聞いたんですけど…あなたが…その…レミさんに…暴力を…振るってるって…」

雄二はしどろもどろだった。

「……」

「だから……」

「くくく……」

レミの旦那は笑った。

「？」

「あいつ……いろんな男をたらしこんでいたんだな」

「??」

「ちよつと待つてろよ」

レミの旦那は部屋に戻り、何か紙切れを持ってきた。それは離婚届だった。レミの方だけ名前が書いてありハンコも押してある。

「あいつは3日前に出ていったよ」

「出ていった？」

「あいつ、週1回だけキャバクラでバイトしてたんだけど、そこで知り合った医者の子と一緒になるって言って、出ていったよ」

「……」

「まったく……怖い女だな。きれいな薔薇にはとげがあるってか」

「そんな……」

「ま、そういうわけだから、残念だったな」

レミの旦那は部屋へと消えていった。

「そんな……」

雄二は外に出た。あまりにもショックだった。突然のことに頭は真っ白になった。

2ヶ月が過ぎた。

雄二は何度もレミに連絡したが、返事は来なかった。

父親は相変わらずうるさかった。鬱陶しかった。仕事は日を追うごとに暇になっていった。

すべての歯車が噛み合わなくなっていく。そんな感じだった。

レミの元・旦那から時々注文が来ることもあった。すでに新しい彼女がいるようで、外から見る限り楽しそうにみえた。

気晴らしにキャバクラに行っても、楽しめない雄二。いや、その瞬間は楽しくても後から来る虚しさに押しつぶされそうになる心。エルにも会っていないかった。会ったところで意味はない。

すべてはレミ。彼女を失った自分に、価値も理由もなかった。

3ヶ月が過ぎた。

雄二は一人暮らしをしていた。

仕事は…今はフリーターだった。職場はカラオケボックスだ。栄一の店は潰れたのだ。正確に言うとな今は栄一は奥さんと二人で小さな食堂を営んでいる。まえに雄二が言ったようにからあげ弁当…ここではからあげ定食だが、それが大人気で、なんとか店の経営を頑張って成り立たせていた。

「…」

雄二は貯金通帳を見ていた。オーケイ弁当時代より少ない収入。オーケイ弁当時代は経営者が親戚だったので多少色を付けてもらっていた。

「世の中は厳しいな…」

そう。当たり前だが世の中は厳しい。栄一は親戚だから雄二が具合が悪そうだったら声をかけてくれたりしていたが、赤の他人はそんなの知らんぷり。

いい職場に務めている奴は全部コネだ。親戚のコネ、親のコネ、友達のコネ、学校のコネ。

政治家の親は必ず子供を政治家にする。政治家なんて何が面白い？とも思うが違う。彼らにとって面白い面白くないはどうでもいい。楽ならなんでもいいのだ。

そんなある日。

雄二は夜、あてもなくうろちよろしていると、小さな黒いカバンを見つけた。

そしてこの出来事が、雄二の運命を大きく変えることになる…。

数日後。

雄二はものすごく久しぶりにエルに会いに行くことにした。もう忘れられているかもしれない。それでもいい。とにかく雄二はエルのもとへと向かった。

「あれ？」

ドアの鍵がしまっていた。

「…」

店内も暗かった。

「まいったな。今日はいないのかなあ」

立ち尽くす雄二。

「連絡先とか知らないしなあ」

10分ほど店の周りをウロウロしていると、エルが突然現れた。近くのコンビニに行っていたらしい。

「ん？…確か君は…木ノ本雄二…くん？」

「エルさん、お久しぶりです」

「やっぱり！ほんとに久しぶりだな。全然来ないからきつと例の彼女とうまくいつてるんだろ？なああって思っ、少し寂しかったよ」

「ははは…」

「で…どうなの？」

「ええ…実は…」

「…うまく…いかなかったんだね？」

「！…はい…」

「やっぱり」

「どうして分かったんですか？」

「ん？うまくいつてる人は、誰かに相談しにきたり、会いに来たりしないもんだからね」

「…」

「まあ入りなよ」

「はい…」

雄二は店内に入った。

「今日は占いはやってないんですか？」

「ああ。ちよつと明日から用事で東京に行くんだ。一週間ほどね」
「そうですか」

「それで…どうだった？そのレミって人の旦那と激しくバトルでもしたのかい？」

「いや実は…」

雄二は店が潰れたこと、レミが医者の子と一緒になったことなど、だいたいの事情を話した。

「なるほど…王将弁当はすごいねえ」

「はい。でかい所には適いません」

「そうか。気の毒に。それにその女性…やっぱ世の中、金なのかねえ」

「…」

雄二は下を向いていた。

「まあまあ雄二君、そんなに暗い顔しないで。人生そんなときもあるさ」

「…エルさんは、ご結婚は？」

「ん？してないよ」

「彼女さんは？」

「んとね…ちよつと気になってる子はいるんだけど…どうだかね」
「そうですか…」

実は雄二はひとつの決意を胸にここに来ていた。

「エルさん、初めてここに来たとき僕はサイコロ振りましたよね」

「ああ、そうだな」

「ちよつともう一回振ってもいいですか？」

「？…いいけど…」

「お願いします」

「分かった」

エルはサイコロを持ってきた。

「……」

雄二はサイコロを握り締めた。

「よし！」

雄二はサイコロを振った。そして、

「！」

出た目は4だった。

「おっ！また4だ」

エルが言った。

「……」

サイコロを見つめながら、雄二は考えた。そして、

「エルさん、ありがとうございます」

「？」

雄二は足早に去っていった。

「ちよつと雄二君……！」

翌朝。

雄二は決断した。雄二はこう考えていた。

昨日のサイコロ。1が出たら父親を殺す。2が出たら王将弁当の副社長の清水を殺す。3が出たらレミの元・旦那を殺す。そして……4が出たら、内閣総理大臣を殺す……と。

5か6が出たら、とりあえず何もしいつもりだった。

「やってやる……」

雄二は危ない考えを持つようになっていた。先日、雄二が拾った黒いカバンには、なんと拳銃が入っていた。これは運命……そんなおかしい考えを持つようになっていた。

来週、隣町で今の総理大臣が、なんかよく分からない地元のイベントに顔を出すらしい。雄二はそこを狙うつもりだった。

弾は4発。当然ガードは厳しいだろう。しかし雄二は決意した。決意してしまった。あの時黒いカバンを拾っていなかったら、こんな考えは持っていなかっただろう。

運命…そんなものがもしあるのなら、人は逆らえないのかもしれない。

そして運命の日。その日はやってきた。

「…」

妙に落ち着いている雄二。朝10時頃に起き、遅い朝食をとり、壁にもたれ座っていた。

イベントはお昼12時から。総理大臣が来るのは2時くらいらしい。隣町には電車で40分くらい。

「さあ…いこうか…」

雄二は電車に乗り込んだ。拳銃の入ったセカンドバッグを手に。

午後1時過ぎ。天気は晴れ。にぎわう隣町の商店街。

いったい誰が、ここで危ないことを考えている若者がいることを想像するだろうか。

まだ時間あるので、コンビニでサンドイッチと缶コーヒーを買い、路上で食べていた。

「…」

時間まであたりをうろついていた。総理大臣が来るということ警察官の姿も多かった。未成年らしき男女数名がタバコを吸っていたので、警察官が来て少しもめていた。

「…」

雄二はそれを横目で見ながら、この国は平和だなと感じていた。

そして…午後2時過ぎ。総理大臣は現れた。SPが何人もいる。警察官もさらに増えたようだ。

しかしおかしいよな。国の指導者、国の一番偉い人（たとえ建前でも）がボディガードを必要とするなんて。国民の代表として国民に好かれなければならないはずなのに、ボディガードとか。

結局、権力者はこの世の支配者「嫌われ者」なのかもな。

総理大臣は笑顔だった。そして何やらこじんまりしたステージの上上がり、なにかスピーチをするようだった。

雄二からの距離は20メートルくらいか。あたりにいるSPや警察官は鋭い目で人々を見ていた。

雄二はゆっくり近づいた。しかし人が多いのでなかなか近づけない。あまり必死に動くと怪しい人物だと思われる。総理大臣のすぐ近くにはSPが二人。少し離れたところに警察官が三人。それ以外の場所にも当然たくさんいる。私服の警官もいるかもしれない。

雄二は距離にして10メートルの所まで近づいた。もう少し近づきたい。携帯電話で写真を撮っている人もいる。雄二は携帯電話を取り出し、あたかも写真を撮りたいがっているフリをしてさらに近づいた。

その距離7メートル。これ以上は無理だ。前の方の人は、ミーハーンなのか支持者なのか、その場を動かこうとしない。

（ここから撃つしかない…）

雄二はセカンドバッグに手を入れた。高鳴る鼓動。さっきまでの喧騒が消えた。もちろん雄二の感覚での話だが。

雄二はセカンドバッグから銃を取り出し、総理大臣に向けた。あるSPがその行動に気づいた。しかし、

”パンッ”

銃声が鳴り響いた。あたりは騒然となった。しかし弾は総理大臣には当たらなかった。

「きゃー！」

あたりが騒ぎ出す。総理大臣のそばのSPは総理を隠した。あたりのSPや警察官は雄二を取り押さえようとして向かってくる。しかし人ごみでなかなか近づけない。

「くそっ！」

雄二は二発目を撃った。

”パンッ”

「うっ！」

二発目はSPの肩に当たった。

”パンッ”

三発目は備えてある花瓶にあたった。

”パリン”

花瓶が割れた。

「くそっ！」

雄二は逃げ出した。SPや警察官は雄二に近づくも、人が多く、パニック状態なのでなかなか捕まえることができなかった。

ようやくなんとかして雄二は人ごみから出た。しかし周りはSPや警察官だらけ。

「…」

雄二は思った。

（終わったな…）

「とまれ！」

「動くな！」

「手を上げる！」

銃を構える警察官たち。

そして…

”パアン”

雄二は自分のこめかみに銃弾を撃ち込んだ。

「！！！」

そしてゆっくり倒れ込む雄二。ざわつく人々。1分ほど前まで笑顔だった総理大臣の顔には、笑顔のえの字もなかった。

木ノ本雄二の短い人生が…その幕を閉じた。

占い師エル。彼の本名は朝倉裕二。字は違えど同じ「ユウジ」だった。これも偶然か必然か。

本業はゴーストライター。将来的には自分で小説を書いてみたいとも思っていた。

エルが雄二の死を知るのは、この事件の約一週間後。

たまたま占いの客が事件現場にいたらしく、その後ネットで調べた雄二の名前が出てきて知ったらしい。事件後、テレビのニュース

でも取り上げられたが、エルはテレビをほとんど観ないので知らなかったのだ。

「……」

サイコロを見つめながらエルは考えていた。

4…それは「死」を意味する数字だったのか…。

偶然か必然か。運命は決まっているのか決まっていらないのか。

誰にも分からない。どれだけ人と語り合おうとも、数百冊、数千冊の本を読もうとも分からない。

だが、それでいいのだ。

分からないから生きる価値がある。分からないから前に進める。永遠に無知なままで、人はこれからも生きていくのだろう。

おわり

（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9340t/>

結論は殺人 その3

2011年6月9日00時06分発行